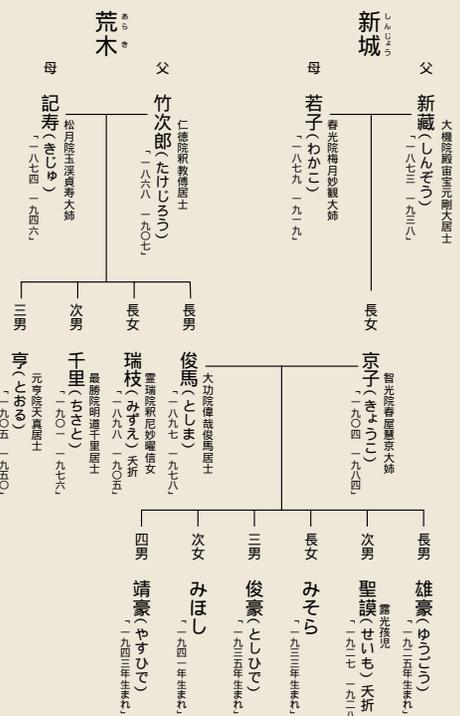


荒木俊馬先生略歴

明治

- 30 (1897)年 熊本県鹿本郡来民町で誕生 (3.20)
- 34 (1901) 弟千里生まれる
- 36 (1903) 来民尋常小学校入学
- 38 (1905) 弟亨生まれる
- 39 (1906) 熊本市立碩臺小学校へ転校
- 40 (1907) 同小卒業 父竹次郎逝去
学制変更により小学校4年制から6年制に
- 43 (1910) 濟々費入学

荒木俊馬先生とご親族

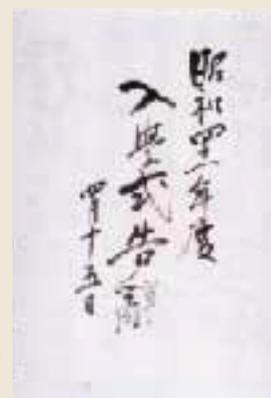
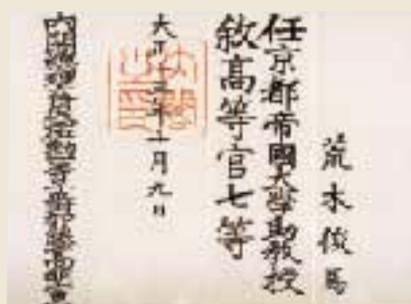
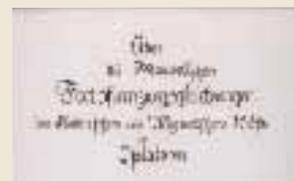
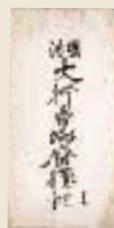


大正

- 4 (1915) 同費卒業 広島高等師範学校理科一部入学
- 6 (1917) 東京独乙語専修学校夏季講座修了
- 8 (1919) 広島高師卒業 滋賀県立彦根中学校教諭
- 9 (1920) 同校休職 京都帝国大学理学部物理学科入学
- 10 (1921) 物理学科から宇宙物理学科へ転科
- 12 (1923) 同大学卒業 同大学理学部講師
- 13 (1924) 新城京子と結婚 同大学理学部助教授
- 14 (1925) 長男雄豪誕生

昭和

- 4 (1929) 欧州留学(約2年間)出発 理学博士号受ける
- 6 (1931) 帰国
- 7 (1932) 宇宙物理学第1講座分担
- 9 (1934) ローソップ島の皆既日食観測
- 11 (1936) 北満・呼瑪の皆既日食観測
- 13 (1938) 新城博士、南京で客死
- 14 (1939) 中華民国行政院文物保管委員会顧問 南京の紫金山天文台復旧指導
- 15 (1940) 日本学術会議天文学・物理学研究会委員
- 16 (1941) 京都帝国大学理学部教授 日本学術振興会委員 中国漢口の皆既日食観測
- 18 (1943) 三高講師兼務 大日本言論報国会評議員
- 19 (1944) 京都府中等学校理科物象教員臨時養成所長兼務 京都帝国大学評議員
- 20 (1945) 大日本言論報国会理事 京都帝国大学教授辞職 夜久野へ隠棲
- 21 (1946) 母記寿逝去
- 22 (1947) 公職追放(C項該当)
- 26 (1951) 追放解除
- 27 (1952) 夜久野教育事務組合教育委員長
- 28 (1953) 大阪商業大学出講
- 29 (1954) 帰洛 大谷大学教授
- 32 (1957) 京都大学理学部、同大学院出講
- 39 (1964) 大谷大学退職 日本天文学会名誉会員
- 40 (1965) 京都産業大学開学 同大学初代学長兼理事長
- 42 (1967) 台湾、欧州各出張 トインビー博士来学・講演
- 44 (1969) 京都産業大学初代総長 同大学第一回卒業式
- 48 (1973) コペルニクス生誕500年事業でポーランドへ招待され講演
- 49 (1974) 京都大学名誉教授
- 51 (1976) ポーランド最高功労十字勲章受章
- 53 (1978) 京都市左京区吉田中大路1の自宅で急性心不全のため逝去(7.10) 享年81歳



最上段は先生自筆の履歷書。
左列は上から成績表(碩臺小、濟々覺、京都帝大)、
ついて助教授、教授の辞令

右列は先生の筆跡。上から中学時代の日記と、創作(未発刊)
の表紙。ついでドイツ語(広島高師卒論)と、日記類(おもに
助教授時代)、下段2葉は京都産大総長時代

人名一覧 人名 生年月日 職業 学歴 履歴の順

あ行

アインシュタイン Albert Einstein 1879–1955 ドイツの物理学者、ベルリン大学など教授。スイス連邦工科大卒。1905年、特殊相対性理論発表。1915年、一般相対性理論発表。1921年、ノーベル物理学賞。1933年、アメリカへ移住、プリンストン大学高等研究所へ。

青井 末治 1909–1991 京都産業大学教授 (名誉教授、英語学)。同志社大文卒。

朝岡 唯夫 1903–1986 豊橋市の眼科病院院長、馬術愛好家。

荒木 淑郎 1927年生まれ 熊本大学教授 (名誉教授)。医博。熊本大医卒。

荒木 千里 1901–1976 京都大学教授 (名誉教授)。医博。京都帝大医卒。 京都産業大学理事、日本外科学会会長 (1954)、日本脳神経外科学会会長

荒木 雄豪 1925–2012 京都産業大学教授 (名誉教授)。京都帝大理 (宇宙物理学) 卒。情報管理、体育実技。本学図書館長、計算機センター室長として学内業務の機械化推進。ローマ (1960)、メキシコ (1968) 両オリンピックの馬術に日本代表出場。

石田 興平 1905–1988 京都産業大学教授 (名誉教授)。経博。京都帝大経卒。大阪大学教授、滋賀大学教授、滋賀大学経済学部長。

石原 純 1881–1947 理論物理学者、東北帝大教授、歌人。理博。東京帝大理卒。

井芹 経平 1865–1926 濟々齋五代齋長 (1896–1923)

磯村 咄夫 1913–1988 磯村産業社長、京都産業大学理事長。京都帝大理 (宇宙物理学) 卒。

イブセン Henrik Ibsen 1828–1906 ノルウェーの劇作家。

岩畔 豪雄 1897–1970 京都産業大学理事、監事、世界問題研究所長。陸士、陸大卒。旧陸軍少将 (1943)。インド独立を支援。

上田弘一郎 1898–1991 京都産業大学教授 (名誉教授)。農博。京都帝大農卒。京大教授 (名誉教授)。竹の専門家。

上田 穰 1892–1976 京都大学教授 (名誉教授)。理博。東京帝大理卒。花山天文台長も。

江崎玲於奈 1925年生まれ。物理学者。理博。東京帝大理卒。エサキ・ダイオード発明、1973年ノーベル物理学賞、1974年文化勲章、1992年に筑波大学学長、のち芝浦工大学長。

エディントン Sir Arthur Stanley Eddington 1882–1944 英国の天文学者、ケンブリッジ大学教授。恒星内部の構造を研究、天体物理学の新分野を拓いた。20世紀最大の天文学者のひとりと言われる。

エルウェシウス Claude Adrien Helvétius 1715–71 フランス啓蒙期の哲学者。1758年「精神論」を発表。イギリスの功利主義者に大きな影響を与えたとされている。

大石 義雄 1903–1991 京都産業大学教授 (名誉教授)、法学部長。法博。京都帝大法卒。京都大学教授 (名誉教授)、憲法学専攻。

岡 潔 1901–1978 京都産業大学教授。理博。京都帝大理卒。奈良女子大学教授 (名誉教授)、数学専攻。1960年文化勲章。

岡田 啓介 1868–1952 海軍軍人、政治家。海兵、海大卒。1924年、海軍大将、海軍大臣 (1927、1932)。内閣総理大臣 (1934)。

桶谷 繁雄 1910–1983 京都産業大学教授。工博。東京帝大冶金卒。東京工業大学教授 (名誉教授)。金属結晶学者、流麗な随筆をものした。

小野 良介 1924–2008 京都産業大学理事長。創設時の設立申請、財務などを統括した。

か行

賀川 豊彦 1888–1960 キリスト教社会運動家。1920年発刊の『死線を越えて』はミリオンセラーになった。

柿野 欽吾 1942年生まれ。経済学者、京都産業大学経済学部教授、理事長。同志社大学経済学研究科博士課程単位取得満期退学、経済学修士。

柏 祐賢 1907–2007 京都産業大学教授 (名誉教授)、学長、理事長。農博。京都帝大農卒。京都大学教授 (名誉教授)。

狩野 直喜 1868–1947 中国文学者、哲学者。京都帝大教授 (名誉教授)。文博。東京帝大文卒。1944年に文化勲章。

ガリレオ Galileo Galilei 1564–1642 イタリアの天文学者、数学者。パドヴァ大学数学教授。コペルニクスの地動説を支持。

カーン Herman Kahn 1922–1983 アメリカの物理学者、戦略研究家、未来学の創始者。カリフォルニア工科大卒、ハドソン研究所長。

カント Immanuel Kant 1724–1804 ドイツの哲学者。ケーニヒスベルク大で博士号。『純粹理性批判』(1781)、『自然科学の形而上学的原理』(1786)。

キッシンジャー Henry Alfred Kissinger 1923年生まれ。アメリカの外交家、国際政治学者。ハーバード大で博士号。国家安全保障問題担当

大統領 (ニクソン) 特別補佐官、國務長官 (フォード大統領時代)。ノーベル平和賞。

木村 正路 1883–1962 京都帝国大学教授 (名誉教授)。理博。京都帝大理 (物理学) 卒。

楠部 彌弼 1897–1984 陶芸家。京都市立陶磁器試験場付属伝習所に学び、日展会員。文化勲章。

グresham Sir Thomas Gresham 1519頃–1579 イギリスの財政家。ケンブリッジ大に学ぶ。「グreshamの法則」で知られている。

桑木 或雄 1878–1945 物理学者、科学史家。九州帝国大学工科大学教授 (名誉教授)。理博。東京帝大理卒。旧制松本高校長。

ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe 1749–1832 ドイツの生んだ文豪。

源田 実 1904–1989 軍人、政治家。京都産業大学理事。海兵、海大卒。海軍大佐、自衛隊航空幕僚長、自民党参議院議員。太平洋戦争中の名パイロット。

コペルニクス Nicolaus Copernicus 1473–1543 ポーランドの天文学者。『天球の回転』を出版して地動説を唱えた。

駒井 正 1931年生まれ。京都産業大学理事長。同志社大卒、第一勧銀支店長、検査役。

今日出海 1903–1984 小説家、評論家、京都産業大学教授、理事。東京帝大仏文卒。明治大学教授、文化庁初代長官、国際交流基金初代理事長、文化功労者。兄は作家、今東光。

さ行

坂井 東洋男 1943年生まれ 中国文学者、京都産業大学教授、学長。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。

佐々 友房 1854–1906 濟々齋創設者、政治家。二代齋長を務め、同齋の「生みの親」と言われている。

佐藤 栄作 1901–1975 政治家。東京帝大法卒、鉄道省入省、運輸事務次官、衆議院議員、官房長官、内閣総理大臣 (1964–72)、ノーベル平和賞。

デ・ジッター Willem De Sitter 1872–1934 オランダの天文学者、ライデン大学教授、ライデン天文台長。膨張宇宙論を着想。

芝原 鏡一 1920–1971 龍谷大学教授。理博。京都帝大理 (宇宙物理学) 卒。広島高師、佛光大各教授も。

シャプレー Harlow Shapley 1885–1972 アメリカの天文学者、ハーバード大教授、同大学天文台長。プリンストン大学で博士号。天体測光学、天体分光学、宇宙論の分野を大きく発展させた。

シャリエ Carl Vilhelm Ludvig Charlier 1862–1934 スウェーデンの天文学者、ルント大学教授。

シュレジンガー Erwin Schrödinger 1887–1961 オーストリアの理論物理学者、ベルリン、オックスフォード、グラーツ各大学教授。波動力学を構築、ノーベル物理学賞。

ショーベンハウエル Arthur Schopenhauer 1788–1860 ドイツの哲学者。主著『意志と表象としての世界』。

ジョンソン Lyndon Baines Johnson 1908–1973 第36代アメリカ大統領。1960年ケネディ大統領が暗殺されて副大統領から就任、1964年再選。

新城 新藏 1873–1938 京都帝国大学教授 (名誉教授)。理博。東京帝大理卒。宇宙物理学、東洋天文学史を専攻。京都帝大に宇宙物理学教室創設。京都帝大理学部長、総長、上海自然科学研究所長。南京で客死。

ジーンズ Sir James Jeans 1877–1946 イギリスの物理学者、科学啓蒙家。ケンブリッジ、プリンストン両大学応用数学教授。

ゼーリガー Hugo von Seeliger 1849–1924 ドイツの天文学者、ミュンヘン大学教授兼天文台長。理論天文学の当時、世界的権威でドイツ天文学会長を務めた。1924年12月2日に亡くなっている。しかし俊馬先生が逝去を知ったのは、日記の通り、ずっとあとになってからであった。

孫 文 Sun Wen 1866–1925 中国の清末の政治家、国民党の創設者。字は逸仙 Yixian、号は中山 Zhongshan。海外留学中の辛亥革命で帰国、中華民国臨時大統領に就任。

ゾンマーフェルト Arnold Sommerfeld 1868–1951 ドイツの物理学者。クラウスタール大学、アーヘン工業大学、ミュンヘン大学各教授。

た行

ダイソン Sir Frank Watson Dyson 1868–1938 イギリスの天文学者、グリニッジ天文台長。

竹田新一郎 1901–1939 天文学者、京都帝国大学理学部助教授。京都帝大理 (宇宙物理学) 卒。彗星の物理的性質や恒星の進化を研究、抜群の業績をあげた。

田中 義一 1864–1929 軍人、政治家。陸軍大将、陸軍大臣、首相。

田村 洋幸 1933年生まれ 京都産業大学教授。文博。広島大学院修了、経済史。

チャイコフスキー Pjotr Il'ich Chajkovskij 1840–1893 ロシアの作曲家。

ツェッペリン伯 Ferdinand von Zeppelin 1838–1917 ドイツのツェッペリン飛行船の創始者。

デカルト René Descartes 1596–1650 フランスの哲学者。解析幾何学の創始者。

寺尾 宏二 1903–1995 京都産業大学教授 (名誉教授)。京都帝大文 (歴史学) 卒。京都帝大教務課長、日本育英会理事。

トインビー Arnold Joseph Toynbee 1889–1975 イギリスの歴史家、ロンドン大学教授。大著『A Study of History』は人類史に新しい展望を拓いたとされている。

ドストエフスキー Fjodor Michajlovich Dostojevskij 1821–1881 ロシアの作家。『貧しき人々』で一躍、有名に。

朝永振一郎 1906–1979 量子力学者、東京教育大学教授、学長 (名誉教授)。理博。京都帝大 (物理学) 卒。文化勲章、ノーベル物理学賞。

鳥淵 隆三 1877–1952 外科免疫学者、京都帝国大学医学部教授 (名誉教授)。医博。京都帝大医卒。日本外科学会名誉会長。

な行

長岡半太郎 1865–1950 物理学者、東京帝国大学教授。理博。東京帝大理工、大阪帝大総長、帝国学士院院長。土星型原子模型を提唱。

ニクソン Richard Nixon 1913–1994 アメリカの政治家、第37代大統領。1960年にケネディに敗れた。また再選中の1972年、ウォーターゲート事件で辞任。

新田 政則 1935年生まれ。経済学者、京都産業大学教授、学長。一橋大学大学院修士課程修了、青山学院大学大学院博士課程単位取得退学。

ニュートン Sir Isaac Newton 1642–1727 イギリスの物理学者、ケンブリッジ大教授。1684年、万有引力の法則を明らかに。力学の基礎法則、微積分法などを見つけた。

能田 忠亮 1901–1989 京都産業大学教授 (名誉教授)。理博。京都帝大理工 (宇宙物理学) 卒。東洋天文学史について、新城新藏博士の後継者のひとり。

は行

ハインリッヒ ハイネ Heinrich Heine 1797–1856 ドイツの詩人。

パスツール Louis Pasteur 1822–1895 フランスの化学者、細菌学者。狂犬病ワクチンなどを発明。

ハッブル Edwin Powell Hubble 1889–1953 アメリカの天文学者。ウイッソン山天文台で、星雲の距離、速度、分布などを研究、銀河のスペクトルの赤方偏移の観測からハッブルの法則を発見した。

ハイゼンベルク Werner Heisenberg 1901–1976 ドイツの理論物理学者、ライプチヒ大学教授。ミュンヘン大に学ぶ。1925年、量子力学を創始。第二次世界大戦中はドイツの原子エネルギー利用研究に携わった。ノーベル物理学賞。

萩原 雄祐 1897–1979 天文学者、東京帝国大学教授 (名誉教授)。理博。東京帝大理工卒。東京天文台長、宇都宮大学学長。文化勲章。

長谷川篤吉 1894–1970 地球物理学者、京都帝国大学教授 (名誉教授)。理博。京都帝大理工 (物理学) 卒。火山温泉研究所長、福井大学学長、徳島大学学長。

ヒッパルコス Hipparchos 紀元前2世紀頃。ロードス島ニカイア生まれの天文学者。地球から太陽、月までの距離を測定。

廣岡 正久 1940年生まれ。政治学者、京都産業大学教授、理事長。博士 (法学)。慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程中途退学。

藤岡 一郎 1943年生まれ。刑法学者、京都産業大学大学院法務研究科教授、学長。同志社大学法学研究科修了、法学修士。

藤原 弘道 1903–1979 東山学園長、京都産業大学理事。大谷大卒、佛教大教授、浄土宗大本山黒谷金戒光明寺第71世法主。

プトレマイオス Klaudios Ptolemaios AD127年生まれのギリシャの天文学者、数学者、地理学者。主著『アルマゲスト』。彼の打ち建てた地球中心の宇宙体系は、コペルニクスによって覆されるまで1400年間、人々に信じられた。

プランク Max Kal Ernst Ludwig Plank 1858–1947 ドイツの物理学者、ベルリン大学教授。ミュンヘン大学に学び、博士号。ベルリン大大学院理論物理研究所長、マックス・プランク協会会長。ノーベル物理学賞。

フルトベングラー Wilhelm Furtwängler 1886–1954 ドイツの音楽指揮者。ライプチヒのゲバントハウス管弦楽団主任指揮者、ベルリンフィルハーモニー、ウィーンフィルハーモニー、ベルリン国立オペラの各指揮者。

フロイントリヒ Erwin Finlay Ferundlich 1885–1964 ドイツの天文学者、ポツダム天文台天体物理観測所教授。ゲッティンゲン大学に学び、ベルリン天文台の天体物理観測所教授も務めた。

ニールス ボーア Niels H.D.Bohr 1885–1962 ノーベル物理学賞。

ポアンカレ Jules Henri Poincaré 1854–1912 フランスの数学者、天体力学者、パリ大学教授。数学で博士号。20世紀初頭、天体力学における三体問題を研究。

ま行

マクスウェル James Clerk Maxwell 1831–1879 イギリスの物理学者、ケンブリッジ大学教授 (実験物理学)。エディンバラ大、ケンブリッジ大で学ぶ。ロンドンのキングス・カレッジ教授 (物理学) も務めた。電磁気学の研究で知られる。

松本 敏三 1890–1965 数学者、京都産業大学教授。理博。京都帝大理工卒。京都帝国大学教授 (名誉教授)。

宮野 高明 1931年生まれ。京都産業大学教授 (名誉教授)。京都大助教授、応用数学専攻。

ミュラー Gustaf Müller 1851–1925 ドイツの天文学者、ポツダム天体物理観測所教授。同所長。

宮崎 滔天 1871–1922 熊本県の人、中華民国革命を援助した志士。孫文と親しく革命運動を支援した。

ミンコフスキー Hermann Minkowski 1864–1909 リトアニア出身の数学者。ケーニヒスベルク、チューリヒ、ゲッティンゲン各大学教授。アインシュタインをチューリヒで教えた人。相対性理論にみられる時空の世界を、数学的な方法で示したとされている。

メンデルスゾーン Felix Mendelssohn 1809–1847 ドイツの作曲家

森 有礼 1847–1889 薩摩出身の政治家。学校令の公布など教育制度の改革に熱心。帝国憲法発布の日、暗殺された。

や行

カール ヤスパーズ Karl Jaspers 1883–1969 ドイツの哲学者。

山本 一清 1889–1959 天文学者、京都帝国大学理学部教授。理博。京都帝大理工 (物理学) 卒。1920年、東亜天文学会を結成。

湯川 秀樹 1907–1981 理論物理学者、平和運動家、京都帝国大学教授 (名誉教授)。京都帝大理工 (物理学) 卒。京都帝大基礎物理研究所長、東京帝大教授各兼任。文化勲章、ノーベル物理学賞。

ら行

マックス ラウエ Max von Laue 1879–1960 ドイツの物理学者。チューリヒ大学物理学教授、ノーベル物理学賞。

ラザフォード Ernest Rutherford 1871–1937 ニュージーランドの物理学者。原子物理学の先駆者。マンチェスター大、ケンブリッジ大教授。ノーベル化学賞。

ラプラス Pierre Simon Laplace 1749–1827 フランスの数学者、天文学者。数学を駆使して天体力学に一時代を画した。またカント・ラプラスの星雲説を唱えた。

ルーテンドルフ Hans Ludendorff 1873–1941 ドイツの天体物理学者、ベルリン大学教授。ベルリン大に学び博士号取得。変光星の研究者。

ローレンツ Hendric Antoon Lorentz 1853–1928 オランダの理論物理学者、ライデン大学教授 (理論物理学)。ライデン大卒、ノーベル物理学賞。

わ行

若泉 敬 1930–1996 京都産業大学教授、世界問題研究所長。東京大学法卒、ロンドン大学の大学院で国際政治学を学び、防衛研研究所員を務めた。トインビー博士との対談をまとめた『トインビーとの対話—未来を生きる』はベストセラーに。

和田 完二 1896–1968 実業家、京都産業大学理事。丸善石油大阪支店長、専務、社長を務め、馬術に関心が深かった。

ワイル Claus Hugo Hermann Weyl 1885–1955 ドイツの数学者、物理学者。ゲッティンゲン大学卒。チューリヒ工科大、ゲッティンゲン各大学教授。「リーマン面の概念」「群論と量子力学」などの論文を発表。

ワイルド Oscar Wilde 1854–1900 イギリスの作家。オックスフォード大学に学ぶ。

ワグナー Richard Wilhelm Wagner 1813–1883 ドイツの音楽家、歌劇作曲家。ライプチヒのトマス教会と大学で教育を受けた。1833年にオペラ『妖精』を作曲、ついで「さまよえるオランダ人 Der Fliegende Holländer (1843)」「タンホイザー」「ローエングリン」などを上演した。

荒木俊馬先生の主な著書・論文一覧

Dr. Toschima Araki

[科学専門書]

日本暦学史概説(自然科学史叢書)	昭和18年7月	山口書店
同 (同)	19年11月	立命館出版部
同	35年2月	恒星社厚生閣
球面天文学(天文宇宙物理学総論)高木公三郎、清永嘉一と共著	22年12月	恒星社厚生閣
太陽系(天文宇宙物理学総論)高木公三郎、清永嘉一と共著	23年11月	恒星社厚生閣
恒星物理学(天文宇宙物理学総論)清永嘉一と共著	24年2月	恒星社厚生閣
銀河系(天文宇宙物理学総論X)	24年9月	恒星社厚生閣
天体力学(上)(天文宇宙物理学総論 a)清永嘉一と共著	24年11月	恒星社厚生閣
質点力学要論	24年11月	恒星社厚生閣
連星(天文宇宙物理学総論)	25年3月	恒星社厚生閣
天文年代学講話	26年9月	恒星社厚生閣
カント・宇宙論(譯書)	27年4月	恒星社厚生閣
星雲宇宙(天文宇宙物理学総論XI)	27年9月	恒星社厚生閣
現代天文学事典(初版)荒木雄豪と共著	31年5月	恒星社厚生閣
同 (増補再版)	34年4月	恒星社厚生閣
(昭和40年11月追加増補3版・昭和45年2月3訂5版・昭和46年8月4訂6版・昭和49年11月7版)		
宇宙構造観	37年5月	恒星社厚生閣
西洋占星術	38年9月	恒星社厚生閣
西洋天文学史	40年4月	恒星社厚生閣
相対性原理概論	44年3月	恒星社厚生閣
宇宙物理学	45年5月	恒星社厚生閣
荒木俊馬論文集	54年7月(没後出版)	恒星社厚生閣
天体力学	55年7月(没後出版)	恒星社厚生閣

[通俗科学書・随筆など]

天文と宇宙 (昭和14年10月改訂版・昭和24年6月戦後改訂版)	12年2月	恒星社厚生閣
天文学概観 (昭和17年2月再版・昭和22年6月戦後初版・昭和24年5月改訂6版)	15年11月	恒星社厚生閣
四季の星座 (昭和23年10月戦後初版・昭和42年6月改訂初版・昭和49年5月4版)	17年2月	恒星社厚生閣
雨夜夢話	17年8月	日本放送出版協会
時と暦(生活科学新書)	17年10月	羽田書店
思想戦と科学	18年9月	新太陽社
科学論叢	18年9月	恒星社厚生閣
日本精神と日本科学	19年9月	恒星社厚生閣
時則と暦法	22年8月	恒星社厚生閣
エネルギーの話	23年2月	やまと書苑
アルプの南北	23年4月	中国文化協会
地球の歴史(銀の鈴文庫)	24年2月	廣島図書株式会社
同	28年9月	恒星社厚生閣
大宇宙の旅	25年2月	恒星社厚生閣
同 (少年少女科学名著全集)	39年11月	國土社
吾輩は水である	26年11月	恒星社厚生閣
月のみちかけの研究(楽しい理科教室1)	27年5月	恒星社厚生閣
晝夜の長さや季節(楽しい理科教室2)	27年9月	恒星社厚生閣
黄道をさまよう天体(楽しい理科教室3)	27年10月	恒星社厚生閣
太陽黒点の研究(楽しい理科教室4)	28年1月	恒星社厚生閣

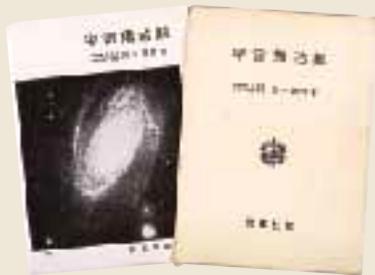
日食と月食(楽しい理科教室5)	28年2月	恒星社厚生閣
教養の天文学	40年4月	恒星社厚生閣
教養の数学	50年4月	恒星社厚生閣

[論文]

ケフェイド変光星の理論的研究	大正13年 - 昭和3年
白色矮星の内部構造理論	昭和9年 - 10年
白鳥座P型の星の研究	昭和11年 - 12年
物質の創出と膨張宇宙について	昭和28年

[その他俊馬先生の逝去後に、長男の雄豪教授によって出版された書物]

狐狸窟瓢論 - 嘯山遺珠	昭和54年6月	恒星社厚生閣
嘯山旅畫帖	昭和55年7月	恒星社厚生閣
嘯山旅日記	昭和59年7月	自費出版



参考文献

本文に引用、あるいはとくに参照させていただいた文献は次の通りです。

日本未来論	ハーマン・カーン著	読売新聞社	昭和44年
済済同窓会名簿	済済同窓会編	済済同窓会	昭和47年
碩台の百年	熊本市立碩台小学校編	碩台校百年記念会	昭和49年
生と愛のサポート	田村洋幸著	協和印刷出版部	昭和51年
トインビーとの対話 - 未来を生きる	アーノルド・J・トインビー、若泉 敬著	毎日新聞社・1971年、講談社・1977年	
嘯山遺珠	荒木俊馬著	恒星社厚生閣	昭和54年
狐狸窟瓢論 - 嘯山遺珠	荒木俊馬著	恒星社厚生閣	昭和54年
アインシュタイン・ショック	金子 務著	河出書房新社	1981年
済々同窓百年史	済々同窓百年史編集委員会編	同窓百年記念事業会	昭和57年
嘯山旅日記	荒木俊馬著	非売品	昭和59年
ショーペンハウアー 人と思想 - 77	遠山義孝著	清水書院	1986年
東洋学の系譜	江上波夫編	大修館書店	1992年
他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス	若泉 敬著	文藝春秋	1994年
嘯川枯枝	荒木俊馬、荒木雄豪著	雄豪先生古稀祝賀会実行委員会	平成7年
現代とトインビー 第93号(終刊号)	「現代とトインビー」編集委員会	トインビー・市民の会	1997年
天文学がわかる。AERA MOOK		朝日新聞社	1999年
教育改革と熊本 - 21世紀を展望して	本田不二郎著	非売品	平成12年
物理学とは何か	豊田利幸著	岩波書店	2000年
大追跡!! アインシュタインの天才脳	杉元賢治著	講談社	2001年

『ショーペンハウアー 人と思想 - 77』(遠山義孝著)については、次の頁から引用させていただきました。

P79 第4 - 7行目、第15 - 16行目	P80 第7 - 10行目	P95 第5 - 7行目	P101 第12 - 13行目
P102 第7行目	P103 第9行目	P105 第6 - 9行目	P124 第9 - 10行目

大学の沿革

1963 昭和38年	4月 本学設立の発起人会発足 8月 京都産業大学敷地として上賀茂国有林を選定	1978 昭和53年	3月 課程修了による初の博士号授与 4月 国際言語科学研究所設置 マセイ大学(ニュージーランド)と交流協定開始 7月 本学創設者、荒木俊馬総長逝去 9月 柏祐賢、学長に就任
1964 昭和39年	6月 京都産業大学設立準備委員会結成	1979 昭和54年	6月 法職講座開設 7月 柏祐賢、理事長に就任
1965 昭和40年	1月 「学校法人京都産業大学寄附行為」認可 「京都産業大学経済学部・理学部」設置認可 荒木俊馬、理事長に就任 4月 京都産業大学開学 経済学部・理学部 荒木俊馬、初代学長に就任 11月 開学式典(1号館)	1980 昭和55年	7月 第1回公開講座(京都府立勤労会館)(平成6年度から市民講座に改称) 8月 電子計算機DEC-2050をDEC-2060に置き換え
1966 昭和41年	4月 追分寮完成 1号館(教養部)・体育館・計算機センター完成 5月 世界問題研究所設置 11月 第1回神山祭、林語堂博士講演会	1981 昭和56年	2月 京都産業大学同窓会館完成 5月 学生健康保険互助会発足 6月 第1研究室棟完成
1967 昭和42年	4月 経営学部・法学部・外国語学部設置 5月 3学部増設記念式典 学歌発表(荒木俊馬作詞・團伊玖磨作曲) 電子計算機TOSBAC-3400・Model-30設置 7月 2号館(理学部)完成 8月 3号館(外国語学部)・4号館(法学部)完成 神山寮完成 10月 7号館(学生関係部室・食堂)完成 11月 輔仁大学(台湾)と交流協定締結 アーノルド・J・トインビー博士講演会	1982 昭和57年	3月 新追分寮市原に完成 4月 法職講座センター・会計職講座センター設置 9月 柏祐賢、学長再任 10月 電子計算機FACOM M-180 II AD設置 11月 国土利用開発研究所設置
1968 昭和43年	3月 5号館(経済学部・経営学部)完成 4月 計算機科学研究所設置 7月 大教室棟完成 10月 ハーマン・カーン博士講演会 12月 総合グラウンド(硬式野球場・陸上競技場・馬場)完成	1983 昭和58年	7月 論文提出による初の博士号授与 9月 マイカー通学の禁止、全車両学内乗り入れ規制実施
1969 昭和44年	1月 理学部に応用数学科増設認可 2月 8号館(第1食堂)完成 小野良介、理事長に就任 3月 第1回経済学部・理学部の卒業式 大学院経済学研究科(経済学専攻)・理学研究科(数学専攻・物理学専攻)修士課程設置認可 荒木俊馬、総長に就任 「京都産業大学報」創刊(～平成12年3月まで) 12月 同窓会発足	1984 昭和59年	4月 教職課程講座センター・情報処理講座センター設置 9月 計算機科学研究所棟増築完成 10月 「清見(きよみ)の滝」庭園完成
1970 昭和45年	3月 保健管理センター棟完成、守衛棟完成 8月 五常寮完成 10月 保健診療所発足、社会保険診療業務を開始 レイモン・アロン博士講演会 12月 第2グラウンド完成	1985 昭和60年	5月 創立20周年記念式典 10月 電子計算機FACOM M-180 II ADをM-380Qに置き換え
1971 昭和46年	3月 理学部応用数学科を「計算機科学科」に名称変更 荒木俊馬、理事長に就任 4月 第2体育館完成 10月 カール・D・エルドマン博士講演会 ポール・A・サミュエルソン博士講演会	1986 昭和61年	4月 現代体育研究所設置 9月 柏祐賢、学長3選
1972 昭和47年	1月 「京都産業大学論集」創刊(社会科学・人文科学・自然科学・外国語と文化系列) 2月 ルイス・ディエス・デル・コラル博士講演会 3月 大学院法学研究科(法学専攻)修士課程の設置認可 6月 津ノ国寮・職員住宅完成 10月 ゲオルギ・A・アルバトフ博士講演会	1987 昭和62年	3月 中央図書館・第2研究室棟・第1実験室棟完成 4月 学内LAN構築 KING(Kyoto Sangyo University Information Network for General System)の敷設 電子計算機VAX-8300導入 10月 電子計算機FACOM M-380QをM-380Rに置き換え
1973 昭和48年	4月 磯村咄夫、理事長に就任 12月 電子計算機HITAC-10 II設置	1988 昭和63年	9月 学内ネットワークにターミナルサーバー(ANNEXターミナルサーバー、DECサーバー200)設置 10月 1号館増築完成
1974 昭和49年	3月 大学院法学研究科に博士課程の設置認可 4月 京都産業大学奨学金制度新設 11月 C・F・フォン・ヴァイツゼッカー博士講演会	1989 平成元年	4月 工学部設置 9月 在ニュージーランド学術交流事務所開設 10月 工学部第2実験室棟完成
1975 昭和50年	7月 松の浦セミナーハウス(滋賀県)完成 10月 語学ラボラトリーセンター設置 開学10周年記念式典	1990 平成2年	4月 生涯学習教育センター設置 9月 柏祐賢、学長4選
1976 昭和51年	4月 全学生対象のLLセンター外国語LL学習コース開講 8月 第1回全国父兄懇談会(昭和58年度から教育懇談会と改称) 10月 電子計算機DEC-2040設置 2号館4階に計算機ターミナル教室開設(日本最初の情報処理教室)	1991 平成3年	10月 電子計算機FACOM M-380RをM-770/8(教育研究用)に置き換え 電子計算機FACOM M-770/6(事務用)設置
1977 昭和52年	3月 大学院外国語学研究科(中国語専攻・言語学専攻)修士課程の設置認可 4月 学校法人京都産業大学 すみれ幼稚園開園 電子計算機DEC-2040をDEC-2050に置き換え	1992 平成4年	3月 神山ホール完成 4月 大学設置基準の大綱化に伴う学則改正
		1993 平成5年	3月 大学院工学研究科(情報通信工学専攻・生物工学専攻)修士課程の設置認可 9号館完成 9月 電子計算機FACOM M-770/6(教育研究・事務用)に一本化
		1994 平成6年	4月 新学生証発行 9月 柏祐賢、学長5選
		1995 平成7年	3月 大学院工学研究科に博士課程の設置認可 4月 一般教育研究センター・英語教育研究センター・外国語教育研究センター・体育教育研究センター設置 5月 創立30周年記念式典 8月 電子計算機FACOM M-770/6をM-1500/40に置き換え 9月 第3研究室棟完成
		1996 平成8年	4月 (財)大学基準協会に維持会員として加入 神山研修室棟完成 10月 新田政則、学長に就任
		1997 平成9年	3月 総合体育館・課外活動棟・神山コロシアム(野外ステージ)完成
		1998 平成10年	6月 アルカラ大学(スペイン)と交流協定締結 蘇州大学(中国)と交流協定締結 10月 国際交流センター設置 11月 国際交流会館完成

1999 平成 11 年	1月 カリフォルニア大学リバーサイド校(アメリカ)と交流協定締結 3月 10号館完成 4月 人権センター設置 6月 駒井正、理事長に就任
2000 平成 12 年	1月 対外経済貿易大学(中国)と交流協定締結 3月 8号館増築完成、11号館完成 4月 パスプールのエスカレーター完成 文化学部設置、セメスター制の導入 京都産業大学通信『サギタリウス』創刊 10月 新田政則、学長再任
2001 平成 13 年	1月 「建学の碑」建立 3月 オックスフォードブルックス大学(イギリス)、パジャジャラン大学(インドネシア)と交流協定締結 8月 新「松の浦セミナーハウス」(滋賀県)完成 10月 ライプチヒ大学(ドイツ)と交流協定締結 11月 『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学一建学の心をたずねて』刊行
2002 平成 14 年	1月 ベルージャ外国人大学(イタリア)と交流協定締結 3月 第4研究室棟完成 4月 大学院マネジメント研究科(マネジメント専攻)修士課程設置 寮開設 総合グラウンド管理棟・トレーニング棟完成 9月 プーシキン記念ロシア語大学(ロシア)と交流協定締結 10月 坂井東洋男、学長に就任 11月 ドナルド・キーン氏講演会 12月 リヨン カトリック大学(フランス)と交流協定締結
2003 平成 15 年	3月 賀茂川寮完成、12号館完成 4月 理学部の数学科、物理学科、計算機科学科をそれぞれ数理科学科、物理科学科、コンピュータ科学科に名称変更 10月 メキシコ国立自治大学(メキシコ)と交流協定締結
2004 平成 16 年	3月 5号館建て替え完成、13号館(法科大学院棟)完成 4月 大学院法務研究科(法科大学院)設置 『教学之源流』刊行 アンソニー・J・レゲット氏講演会 12月 廣岡正久、理事長に就任 バーノン・L・スミス氏講演会 梨花女子大学(韓国)、復旦大学(中国)と交流協定締結
2005 平成 17 年	2月 本学全額出資の株式会社サギタリウス企画設立 4月 創立50周年(2015年)を目指したグランドデザインの設定 大学院外国語学研究科(英米語学専攻)修士課程設置 大学改革推進室設置 キャリア教育研究開発センター設置 ボランティア活動室設置 8月 ケルン大学(ドイツ)と交流協定締結 11月 創立40周年記念式典 『京都産業大学40年史』刊行 12月 慶熙大学(韓国)と交流協定締結
2006 平成 18 年	2月 ガジャマダ大学(インドネシア)と交流協定締結 香港中文大学(中国)と交流協定締結 ミズーリ大学セントルイス校(アメリカ)と交流協定締結 5月 エディス・コーワン大学(オーストラリア)と交流協定締結 6月 ノルマンディー・ビジネス・スクール(フランス)と交流協定締結 10月 坂井東洋男、学長再任 鳥インフルエンザ研究センター設置 大学院マネジメント研究科に「デュアル・ディグリー・プログラム」設置 11月 サンディエゴ州立大学(アメリカ)と交流協定締結

2007 平成 19 年	1月 ケント大学(イギリス)と交流協定締結 アイスランド大学(アイスランド)と交流協定締結 2月 神山球技場・管理棟完成 3月 総合グラウンド屋内野球練習場完成 4月 第2課外活動棟完成 経営学部に「ソーシャル・マネジメント学科」 「会計ファイナンス学科」増設 大学院経済学研究科(通信教育課程)設置 学校法人京都産業大学附属中学校・高等学校開校 アルゴマ大学カレッジ(カナダ)と交流協定締結 5月 ハルビン師範大学(中国)と交流協定締結 トンブソンリバーズ大学(カナダ)と交流協定締結 6月 すみれ幼稚園開園30周年記念式典 9月 教学センター設置 11月 サレント大学(イタリア)と交流協定締結
2008 平成 20 年	2月 ノースカロライナ大学グリーンズボロー校(アメリカ)と交流協定締結 ユヴァスキュラ大学(フィンランド)と交流協定締結 4月 コンピュータ理工学部設置 外国語部に「国際関係学科」増設 10月 坂井東洋男、学長3選 益川敏英理学部教授、ノーベル物理学賞受賞 11月 益川敏英理学部教授、文化勲章受賞 12月 国立ラプラタ大学(アルゼンチン)と交流協定締結
2009 平成 21 年	4月 法学部に法政策学科増設 大学院マネジメント研究科にコーポレート・コミュニケーション・コース増設 6月 益川敏英教授を塾頭とする「益川塾」(研究者の育成と科学の普及を目指す)設立 8月 国立グライフスヴァルト大学(ドイツ)と交流協定締結 9月 14号館・第5研究室棟完成 8号館前エスカレーター完成 10月 国立アダム ミツケヴィチ大学(ポーランド)と交流協定締結 京都産業大学同窓会40周年記念式典 12月 神山天文台完成
2010 平成 22 年	3月 15号館完成 4月 総合生命科学部設置 ツールーズ第一キャピトル大学(フランス)と交流協定締結 6月 サラマンカ大学(スペイン)と交流協定締結 16号館(第1実験室棟増築棟)完成 7月 ラ・リオハ大学(スペイン)と交流協定締結 北京科技大学(中国)と交流協定締結 9月 ハワイ大学ヒロ校(アメリカ)と交流協定締結 10月 藤岡一郎、学長に就任
2011 平成 23 年	3月 マヒドン大学(タイ)と交流協定締結 4月 大学院先端情報学研究科修士課程設置 柿野欽吾、理事長に就任 8月 タスマニア大学(オーストラリア)と交流協定締結 9月 バレンシア・ポリテクニク大学(スペイン)と交流協定締結 パヤップ大学(タイ)と交流協定締結 クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(ニュージーランド)と交流協定締結 10月 ヴィドヤー・ブラサーラク・マンダラ大学(インド)と交流協定締結 11月 リーズ大学(イギリス)と交流協定締結
2012 平成 24 年	2月 上海社会科学院(中国)と交流協定締結 壬生校地(むすびわざ館・附属中学校・高等学校新校舎)完成 3月 マッコリー大学(オーストラリア)と交流協定締結 4月 むすびわざ館開設 附属中学校・高等学校、壬生校地へ移転 6月 ミツバチ産業科学研究センター設置 ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学と交流協定締結 11月 創立50周年記念事業「むすびわざDNAプロジェクト」始動宣言式典開催

監修によせて

このたび京都産業大学において『学祖荒木俊馬先生と京都産業大学 - 建学の心をたずねて』を作成して頂いたことは、私としましては全く思いがけなかった事であると共に誠に有難く、そして又これまでごく一部を除いては殆んど目を通した事のなかった父の日記類が、今回ほぼ全部デジタル化されたので、その校正を通じて今まで私の知らなかった事を詳しく知る機会が得られ、非常に嬉しく思っている。

この機会に父の一生を考えてみると、それはほぼ20年 - 25年ごとに四つの時期に分けられると思う。最初の時期は京都帝国大学に入学した23歳(1920)まで、次は第二次世界大戦の終結した48歳(1945)まで、そして京都産業大学が創設された68歳(1965)までとそれ以降である。

第一の時期は、世界情勢としては東インド会社や阿片戦争の例に見られるようにヨーロッパ各国による植民地獲得競争の時代であり、官僚の腐敗により近代化の遅れた清朝末期の中国では、阿片戦争の敗北後、香港を始めとする植民地や租界を列強により割譲させられるという状況であり、また日本においても幕末に各国から押しつけられた不平等条約の改正問題で苦慮している時代であった。

当時、祖父竹次郎は鹿本中学の初代校長であったが、高等師範の恩師である嘉納治五郎先生が日清戦争後における清国の近代化を援助すべく多数の中国留学生を受け入れて教育をしておられたので、嘉納先生のご懇請により校長を辞めて上京し、留学生の指導に当ることとなった。そしてその赴任の途中にして客死したのであるが、これは父が10歳の時の事であり(1907) またその翌年には父の叔父である浦順平が中国に渡り、広東の高等師範学堂の教育学教師となって中国人生徒の教育に従事していたが、病を得てその地で客死(1909)するという事もあり、父も中国との友好には子供心にも関心を持っていたものと思われる。

また濟々費時代(1910 ~ 1915)には、創設者佐々友房のたてた三綱領の影響を強く受けると共に、「滅清興漢」を掲げた辛亥革命(1911)により清朝を倒した孫文の来襲により親しくその警咳に接し、その祖国と民族を思う心に強い感銘を受けたようである。またこの濟々費の大先輩であり日本における中国文学の第一人者である狩野直喜先生には弟千里共々、生涯深く私淑しており、後年京大を辞める際にもご意見を伺い上っている。

中学を出てから広島の高等師範(1915 ~ 1919)に進んだのには、その頃の家庭の経済事情も大きかったと思うが、竹次郎や浦順平と同様、教育を天職と考えていた事が大きな理由であったと思われる。この時代には語学にも熱心で、夏休みを利用して東京までドイツ語の勉強に行き、マックスウェルの電磁気学に関する卒業論文もドイツ語で書いている。

第二の時期は京都帝国大学時代とも言えると思うが、この時期は二十世紀の初頭に発表された量子論(1900)と相対論(1905)により物理学が画期的に発展した時代であり、父も専ら宇宙物理学の研究に没頭した時期である。学生時代に相対論の創始者であり当時世界的な話題の中心人物であったアインシュタインが来日した(1922)のであるが、この時には新城教授の薦めで共に東京までその講義を聴きに行き、また京都帝国大学における彼の歓迎会の際には学生代表として歓迎の挨拶をした。アインシュタインの当時の日記には、その時の総長(荒木寅三郎)と学生代表が、非常に心のこもった挨拶を非の打ちどころのないドイツ語でした、と記されているということである。その後アインシュタインには昭和初期のドイツ留学(1929 ~ 1931)時代にベルリン大学でも大きな感化を受けたが、それはコペルニクスの転回により旧来のニュートン力学の壁を破り、より高い次元から物事を考えるという柔軟で自由な彼の発想の仕方ではなからうか。

卒業(1923)した翌年に助教授となり「天体力学」の講義を命じられたが、この当時の天文学上における大きな出来事の一つは海王星発見(1846)物語であった。これはそれまでは全く未知であったこの新惑星が、天体力学の摂動理論によりその予測位置が計算され、殆んどその予報された通りの位置で発見されたということであり、ニュートン力学の勝利とも言われたものだそうであった。この学問は父の専門としようとする研究分野ではなかったものの、理論天文学者として大いに興味を持った学問分野であり、また新しく開講された科目でもあったので毎年ノートを新しく作って講義をしたそうである。

日記によれば、そのころには量子論の研究もしており、ドイツ留学の前年、昭和3年の天体力学の講義の受講生であった物理及び天文の三年生の有志十数名に依頼されて、この講義を終了した後に「量子力学」の集中講義を15回行ったが、それが日本最初の量子力学の講義であった事は、その時の受講生であった湯川、朝永両博士の思い出話から伺う事が出来る(両博士の対話・岩波書店「図書」10[1982])

そして、ドイツ留学時代に最も熱心に勉強したのは、その頃完成期に入ったハイゼンベルグの量子力学とシュレーディンガーの波動力学だったそうであり(『天体力学』序) また「科学に国境はないとしても、科学者には祖国がある」とはパスツールの言葉だそうであるが、後年第二次世界大戦で敗れたドイツにおいて極度の不自由を忍んで研究を続け、アメリカへの帰化を薦められても断ったといわれるハイゼンベルグからも大きな影響を受けたと思われる(『狐狸窟飄論』第三部の「科学と科学者と祖国」)

この時期の後半には日中戦争から第二次世界大戦(当時は大東亜戦争といわれていた)に入り、各種の制約の厳しい時代となった。少年時代の思い出や狩野先生および東洋天文学史の権威でもあった新城の影響もあって常々中国の文化には敬意を払っており、且つまた特に自由を愛し極端に束縛を嫌っていた父ではあるが、戦争が始まった以上は自分の国の足を引っ張るような真似はすべきではなく、それは祖国に対する背信行為であると考えていた。当時の宇宙物理学教室でも専門を生かして電波探知機の研究を行っていたようであるが、これは戦後に開発された電波天文学の先駆をなすものではなからうか。

この時期には又、大日本言論報国会理事として国威発揚および士気高揚のために各地で言論報国会活動を行っているが、これもまた純粋な愛国の至情から出たものであった。これは戦後、公職追放の項目に該当する事となったが、終戦と同時に大学を辞めた父は全く痛痒を感じず、むしろ誇りと考えていたと思う。

終戦直後、「アメリカ幕府の禄を喰はず」として京大を辞して野に下ってから本学の開学に到る第三の時期は、隠棲と遁世の時代とも言えると思う。この時代には戦時中は自分から進んで軍部に協力していながら戦後になって掌を返すような態度を示す、いわゆる文化人が多かったのであるが、そのような連中を心から軽蔑していた。そして生れて初めて移り住んだ夜久野の地で晴耕雨読を志したのであった。それまで殆んど肉体労働をした事のない父ではあるが、開墾や薯類の栽培などに関しても研究しながらそれに取り組み、かなりの収穫は挙げたようである。しかし天文に対する想いは強く、晴耕雨読も並行して行い、それまでの研究を集大成した『天文学物理学総論』の構想を練って7冊目まで出版し、続いてこれを未刊部分をも含めた『現代天文学事典』として纏め直して刊行したのである。その当時の私は高等学校時代の騎道部で習い始めた馬術に魅入られて、大学卒業後も馬に乗り惚けて縁が切れず、天文学の方はすっかり疎かになっていたのであるが、この総論から事典に含まれている諸計算は殆んど総て父に言われて私がチェックを行った。そして時々計算間違いを発見したのであるが、計算に自信のあった父は仲々その間違いを認めず、そのたびに父と私とで何度も計算のやり直しをやり、私の方が正しかった場合もあった事を覚えている。そんな事で、この事典は初版出版の時には父と私との共著という形にしていたが、その後、日本馬術界の改革に没頭して学問に身の入らない私が気に入らず、大喧嘩をして家を飛び出してからは父も怒って私の共著者名を削ってしまった。これは私にとってはユーモラスで懐かしい思い出である。この少し前に、宇宙論に興味を持っていた私は父に薦められて、相対論の教科書ともいべきエディントンの『空間、時間、重力』の翻訳をしたが、この二つを最後として全く天文から離れて馬術の方にのめりこんでしまった。父にとっては誠に不肖、不孝の子であった事を心から申し訳なく思っている。しかし厳しい予選を突破して、ローマ・オリンピックに出場する事になった時に、思いがけず非常に喜んでくれた事や、また帰国してからは私も再び家に帰り、本学の設立には僅かながらも最初から手助けの出来た事がせめてもの償いになればと願っている。また夜久野時代の父はその地区の教育委員長に推されていたのであるが、かねがね戦後の日本における教育問題については非常に心を傷めており、とくに本来の日本の美德を失い、以前の理念、道徳などを否定しようとした、いわゆる戦後民主主義に基づく当時の教育方針に批判的であった。そして次代の日本を背負って立つ若人の教育をこのままにしておいてはいかぬ、万難を排して何とかすべきである、という事を非常に強く考えており、それを実際の行動に移すべく昭和29年に京都に帰ったのである。

夜久野を去るに当って知人宅に書き残して来た書があるが、それは日中戦争の最中に危険を冒して上海自然科学研究所長として赴任し、貴重な中国文化財を戦争の災害から守るべく努力しつつ南京で客死した新城が、中国へ出発する際に狩野先生から贈られた書を写したものである。京都に帰ってからは大谷大学の教授をつとめる傍ら、自由文教人連盟や全日本教育父母会議、郷友連、新日本協議会その他において全国各地で言論活動を続けたのであるが、それに同調される方々が多く、因らずも京都産業大学創設の大きな原動力となったものと思われる。

「日本国民であることの自覚に徹し、利己心を捨てて公共の為に献身し、国際的見地に立った愛国心を通して全人類の平和と幸福に貢献し、基本(的)人権の尊重と個人の自由の精神に徹し、国際場裡において指導的役割を果し得る人物を作る」(第1回入学式告辞)ことを建学の精神に掲げて創設された京都産業大学においては、学生のために特に優秀な教授陣を揃えることに苦心し、その為には百里の道も遠しとはしなかったと思う。そして自分の若かった頃の経験から、学生達には超一流の人物の言談に接しさせる事が非常に重要であると考え、トインビー博士を始めとする世界の大家を招聘して学生への講演をして貰ったのであるが、博士は高齢になっても柔軟な思考を失わず、その世界観についても以前の著作に縛られることなく日々新たな境地を切り拓いて行く碩学であった。従ってその精神を学生達に学んで欲しいと考えていたのだと思うが、晩年の父を考えると、その恩恵を最も大きく受けたのは父自身だったのではなからうかと思われる。新城は「又日新(又日に新たなり)」という言葉が好きで、又新居士とあだ名されていたそうであるが、父もその教えを受け継いでいたのであろうか。

天下の広居に居り 天下の正位に立ち 天下の大道を行く
志を得れば民と之により 志を得ざれば独りその道を行く
富貴も淫する能わず 貧賤も移す能わず 威武も屈する能わず
此を之 大丈夫と謂う

は父の最も好んでいた言葉であるが、正にその心境を表しているような気がする。

開学から定年までちょうど30年間、教員として在職した私は、これまで京都産業大学の発展をつぶさに見てきたのであるが、今ここに建学の心に触れようという試みが改めて生じてきた事は誠に感無量であり、この事を心にかけて下さった現在の理事長、学長をはじめ関係各位の方々に対して心よりお礼を申し上げますと共に、この冊子が本学の建学の精神を再び思い起して頂くよすがともなれば嬉しく思う次第である。

なお、この冊子の製作は、現存する大正3年(1914、父17歳)から昭和53年に亡くなるまでの父の日記、ならびにその他の数多くの関係資料を詳細に検討しなければ出来なかった大変な仕事であると思うが、ここで実に正論を射てしかも簡潔に纏めて頂き、私自身でも改めて父を再認識する事が出来たような気がする。この仕事をお引受け頂いた永田孝氏は、広島大学理学部地学科のご卒業で正に父の直系の後輩に当られ、それだからこそ専門的な学問的内容まで深くご理解の上、余人では出来ないようなこの仕事をして下さったものと思われ、改めて心より感謝を申し上げます次第である。

平成13年秋 荒木 雄豪

あとがき

この冊子は、荒木俊馬先生のご長子の荒木雄豪・京都産業大学名誉教授からお借りした、俊馬先生の百数十万字に及ぶ膨大な日記(大正3年から昭和53年までの64年間)のほか、辞令、保管資料、アルバム、メモ、書簡、未公開の原稿、自ら描かれた絵画、揮毫などをもとに編集されました。

貴重な資料を快く提供して下さり、さらに冊子を監修してくださいました荒木名誉教授に深く感謝します。インタビューに応じてくださいました方々、いろいろな資料を提供してくださいました方々、そして書物から引用させていただいたその筆者と出版社の方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

冊子の本文につきましては、本学の荒木俊馬記念誌編集アドバイザー、永田孝氏(元・毎日新聞社論説副委員長)が執筆しました。

過去・現在・未来にわたって、京都産業大学に関わる人たちの、心の絆になることを希い、この冊子を発行しました。

学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学 — 建学の心をたずねて

発行日 平成13(2001)年11月27日 第一版 一刷
平成25(2013)年4月1日 第二版 九刷

編集・発行 学校法人 京都産業大学
大学史編纂室

京都市北区上賀茂本山
TEL 075-705-1995
FAX 075-705-3146

印刷 大日本印刷株式会社

© 京都産業大学